

琉球国と濟州島の歴史的関係

—予備的考察—

豊見山 和行

はじめに

琉球と朝鮮の関係史については、戦前の東恩納寛惇、小葉田淳、戦後では田中健夫、各氏の研究蓄積がある。これらの研究は大づかみに言えば概括的・概観的であるが、近年では、特に韓国側の研究者によって琉球・朝鮮間交流史に関する史料集(1)が取りまとめられたり、あるいは個別論文による研究が深められつつある(2)。他方、日本側の研究も個別テーマによる分析がなされてつつあるが、その中で漂流・漂着に関連する論考が焦点のひとつとなっている(3)。

小論では、これらの研究史を踏まえ、琉球と朝鮮国全体との交流ではなく、特に濟州島との関わりを中心に二、三の問題を検討する。

1. 牛島と琉球

旧来の研究では、朝鮮王朝全体と琉球との関係に主眼が置かれてきたが、ここではより地域を限定し、濟州島の離島である牛島との関わりを検討する。濟州島と琉球の関わりについては、すでに金泰能氏の論考がある(4)。その成果を念頭に、まず牛島へ漂着した琉球人に関する史料を示すと次のものがある(「耽羅紀年」『心齋集(Ⅱ)』濟州文化社、1990年)。

九年(清嘉慶十四年、1809年)

是年琉球国巡見官翁世煌・史官姚世康・毛維煥等漂到牛島、巡見官髻上挿金簪々頭如菊花、頭戴紫綾冠、腰黃緞大帶、足躡紅靴、史官皆挿銀簪、戴黃綾冠、被紺色周衣大袖長裔、日奉国王命、巡察民情到大島、竣事而還遇風漂来、王都在中山地、国俗都無印信、公行文蹟皆以墨套用之云、

上記の史料を要約すると、1809年、琉球国の巡見官である翁世煌、史官の姚世康・毛維煥らが牛島へ漂着した。その際の衣装は次のように記されている。すなわち、巡見官の翁は金の簪を髪に挿し、その簪の頭部は菊の花のようであった。そして「紫綾」の冠（ハチマチ）を戴き、紅靴を履いていた。史官は皆、銀の簪を挿し、「黄綾」冠を被り、大袖で長裾の周衣（袍衣か）をまとっていた。さらに、牛島へ漂着したのは、大島（奄美）の民情巡検の帰途であるとしている。そして、琉球の王都は中山にあること、さらに印信（印鑑）を用いないこと、公文書では墨書によること、などを記している。

右の答えで、大島への巡検の帰路で漂流した点には検討を要する。結論的に言えば、鹿児島（日本）との関係を隠匿するためにの返答であると言えよう。恐らく、鹿児島からの帰路において牛島へ漂着したものと考えられる。しかし、当該期の琉球は日本との関係を対外的に隠匿していたため、このような回答になったものと言えよう。

その他、牛島へは右の二年前の1807年にも琉球国人6名が漂着したことを小林らはずでに指摘している(5)。

これら牛島へ漂着した琉球人らがどのような経緯で漂着し、さらに帰国までにどのような処遇を朝鮮王朝から受けたかは、今後の課題である。

補足すれば、牛島における臨地調査（1999年10月）では、上記に関わる史料や伝承は残念ながら確認することができなかった。

2. 琉球王子遭害事件伝承と済州島

済州島の民間には、同島に琉球王子が漂着したが、琉球船に積み込んでいた宝物に目くらんだ同島の牧使によって殺害されたという伝承が伝わっている。崔常壽氏は、それが伝承としてだけでなく、朴趾源「燕岩集」（朝鮮王朝後期）等に詳しく記録されていることを紹介している(6)。崔氏は前掲「燕岩集」だけでなく、「朝鮮王朝実録」仁祖元年（1623）四月条に「琉球国世子漂到我境、使辺臣潜殺・・・」とあることから、伝承と史実が合致するとして、この事件の考証を行っている。すなわち、その事件は1609年に琉球が薩摩藩島津氏に攻略され、尚寧王らが鹿児島へと連行された時期のものであるが、文献では、約10年ほどずれがあることなどを明らかにしている。

ここでは、崔氏の考証についてその当否を取り上げるものではない。その史実の確定は別の機会に譲り、済州島の住民が朝鮮王朝時代に確かにその琉球王子遭害事件を記憶していたことを取り上げてみたい。

済州島民の張漢喆は、1770年冬、ソウルでの科挙に応じるため同島を出港したもの

の、出港間も無く強風にあおられて外洋へ押し流され、漂流してしまった。琉球近海とされる無人島へ漂着し、助けを求めた船が倭寇であった。そのため物品を強奪され、かろうじて安南船に救助された。ところが、安南人らはかつて済州島民（耽羅人）に安南王子を殺害されたことがあるとして、張ら一行へ憎悪を募らせたため張らは安南船から海に抛り出され、またも漂流することになった。ようやく全羅南道の青山島近海の一小島へたどり着き、九死に一生を得てソウルで科挙を受けたが、不合格となり済州島へもどった、というものである。

一八世紀に倭寇が登場することや安南船での出来事など、これらをすべて史実として位置づけられるかどうかは、なお検討の余地がある。ただし、張が最初の漂流の際、琉球への漂着を恐れていた点は、済州島民が琉球をどのように認識していたかを知る上では貴重な素材と言えよう。すなわち、その部分とは、

「昔、わが国と琉球とは親交があつて、琉球から使臣が来ると今の全羅道の順天府にある昇平館に泊まったものである。なにしろ海路が遠く隔たっているので往来がそう頻繁ではなかった。ある時期、相前後して三人の使臣が来朝したことがあり、その内の二人のことは忘れて今思い出せないが、光海朝の辛亥年間（光海三年）、琉球太子一行が遭難して耽羅に流れ着いたことがあつた。時の牧使（行政官）は彼等一行を略奪者だどこじつけて処刑し、財貨や宝石などを取り上げた。それ以来両国は断交状態になったといわれている。私達が（琉球に）到着すれば復讐されるかも知れないので、それを恐れているのだ」（7）。

この内容は、不正確なものであろうが、少なくとも済州島の牧使による琉球王子殺害事件がかつてあつたと認識していた点は間違いない。

この事件そのもの当否については、前述のようにここでは問題にしない。むしろ、言説としての琉球王子遭害事件を済州島民が認識していたという点が重要であると考え。つまり、済州島と琉球の関係についての認識、換言すれば、済州島民—ただし、張は科挙を受験するほどのエリート—の琉球認識の一端が、如実に示されているということである。

むすびにかえて

琉球・朝鮮王朝間の公式な交流は、1609年の薩摩藩支配以後の近世では途絶えてしまう。もちろん、北京において両国の朝貢使節が交流していたことは事実であるが、古琉球時代のように琉球から直接朝鮮へ使者を派遣するような外交形式は採られなくなる。

しかし、済州島と琉球は、近世においても上記のような漂流という不慮の出来事による交流は断続的に続いていた。また、1702年に作成された『耽羅巡歴図』中の「漢拏壯囑」

には、南側に「大琉球」と島影をかすかに描いている(8)。18世紀初頭において、濟州島(耽羅)を中心とした地理的、空間的認識を知る上でも上記の絵図は、貴重な素材を提供しているといえよう。

[註]

- (1) 孫承喆、他編『朝鮮・琉球関係史料集成』(国史編纂委員会、1998年)
- (2) 例えば、李薰(松原孝俊・金明美訳)「朝鮮王朝時代後期漂民の送還を通してみた朝鮮・琉球関係」(『歴代宝案研究』第8号、1997年)。
- (3) 松原孝俊「琉球の朝鮮語通詞と朝鮮の琉球語通詞」(『歴代宝案研究』第8号、1997年)。小林茂・松原孝俊・六反田豊「朝鮮から琉球へ、琉球から朝鮮への漂流年表」(『歴代宝案研究』第9号、1998年)。
- (4) 金泰能(大口里子訳)「琉球と濟州との関係」(『南島史学』第20号、1982年)。
- (5) 前掲註3、小林・松原・六反田論考。125頁。
- (6) 崔常壽「琉球王子の濟州島漂着伝承」(『濟州島』1968年)。
- (7) 張漢喆(宋昌彬訳)『漂海録』(耽羅叢書2、新幹社、1990年)。
- (8) 『耽羅巡歴図』(濟州市、1994年)。詞書きとして、琉球との距離を「午距琉球国五千餘里」と記している(21頁)。

環東中国海における 二つの周辺文化に関する研究

— 沖縄と済州の「間地方」人類学の試み —

平成 10～12 年度科学研究費補助金
基盤研究 (A) (2) 研究成果報告書
課題番号 10044011

平成 13 年 3 月

研究代表者 津 波 高 志

(琉球大学法文学部教授)